

「詩」 臨時教員の人間宣言

作・山口八重子（信子）

嫁入り前の娘のように
しおらしく、愛らしく
返事は、素直にはつきりと
仕事は、まじめにきちんとします

私は、臨時教員ですもの
正採用教員になれるように
次の任用が決まるように

仕事も修業のうち
毎日が売り込みの日々
どんな仕事でも
にっこり笑顔で引き受けます
嫁入り前の娘のように

ある日、「私、結婚します。」と言ったら
校長の目が、眼鏡の底から言った
「今年は、子どもを作らないだろうね。」

ある日、妊娠していることを知った私
任期が終わるまで、お腹の子が無事であることを
ひたすら願っていた
「産休の先生が産休を取るなんて、できないもの。」

ある日、病気になり、入院することになった
「私、今入院するわけにはいかないんです。」
病院の先生に、半年延ばして下さいと泣きついた私
まだ、任期が半年残っていた

私は、こうして臨時教員生活を十数年続けてきた
いつも、自分の要求を笑顔の奥に押し込めて

ある年、一年間の期限付きの講師に任用された
たんぼぼの花咲く田園の中の学校で
ぴかぴかの一年生の担任だった

「先生、はなちゃんが泣いているよ。」
「まさるくん、どうしたの。あらあ、のりがべたべた。」
「みっちゃんがまだ来ない。どうしたのかしら。」
子どもたちといっしょでうれしかった
そしていそがしかった

日中は子どもたちと真剣勝負
子どもたちが帰った後も
会議、授業研究、学級事務に職員作業
経験年数も多く、給料も高い私に容赦はない
雨あられと降ってくる仕事をこなし
家にたどり着くと、食事もそこそこに
畳の上に転がって眠ってしまう

夜中に目を覚まし、灯りの下で仕事に向かう
やがて睡眠時間が四時間型になり
仕事しか見えなくなってしまう私

別れの三月

「先生は、教員の鑑です。よくやって下さった。」
と言って、校長は私を送りだした

そして四月

約束された仕事はなかった

「予定された学級増がなくて、申し訳ありません。」
教育委員会からの電話の一言で、私は、失業した

身をすり減らして働いても

教育委員会の都合で、首を切られる

どんなに教育成果を上げても

次の任用は、確約されない

失業し、家で待機していても

四時間型の睡眠が体に残り

夜中に目が覚める

暗闇の中で、私の人生を考える

妊娠を心から喜べなかった私

自分の命よりも、仕事を心配していた私

家庭よりも、仕事に夢中だった私

そんな私に、教育委員会は

丈夫な体で、元気に仕事をこなす

私のいいところだけを欲しがった

生身の体で

病気にもなれば、疲れもする

子どもも産めば、家庭もある

年も取れば、老後もある

そんな私には、目をつぶり

私の人生のいいところだけを吸い取ってきた

でも、私は、生きている人間なんです

そして、人間を育てている教員なんです

私の体をぶち切りにして

いいところだけを食べないで下さい

私に、失業の代わりに、仕事を下さい

産休の代わりに先生をしてきた私に、産休を下さい

そして何よりも、自分の要求を言える権利を下さい

私は、今日、ここに、臨時教員は、人間であることを宣言します

一九九一年年三月二四日